

日本プロバスケットボールの可能性と課題の検討

A study on the issue and the potential of the professional basketball league in Japan

1K10C090-1 大野 将司

主査 作野 誠一 先生

副査 間野 義之 先生

【研究背景及び研究目的】

2013年新リーグであるNBLが発足したことにより今後プロバスケットボール界は新たな道をたどることとなるが、今回の新リーグ発足に関して多くの課題点が残された。目標の一つであったJBLとbjリーグの統合は実現しなかったが、NBLの運営に見られるように日本バスケットボールが本格的にプロ化へと動き始めた。この流れが日本のバスケットボール界にどのような影響を与え、また各チームに自主興行を義務づけプロ化色を強めたNBLにおいて企業チームのプロ化へつなげる課題点及び今後のリーグ構想を研究する。

そこで以下2つを本研究の目的とする。

1. 両リーグ統合の是非の検討
2. 両リーグの展望及び現状の課題

【方法】

新リーグであるNBLの設立にあたり前身でもあるJBL及びbjリーグの両リーグの設立経緯や運営方法の違い、現状の課題、またそこから両リーグ統合に至らなかった争点を明らかにするため資料収集及び両リーグ関係者へのインタビュー調査を行った。具体的にはNBL経営企画グループ、bjリーグ広報部の方々に対して「統合交渉の争点」「現在の運営方法」「地域化」「今後のビジョン」等、統合に至らなかった各方面の理由及び課題と運営方法や方向性の違いによる統合の難しさを図るキーワードを設定し、それらについてインタビューした結果を基に考察を行った。

【結果】

1. 両リーグ統合の課題

インタビュー結果から共通して得られたことは両リーグとも各チームの経営体力に未だ懸念があるということである。今回のbjリーグからNBLに参入したチームが1つしかなかったことも、NBLに参入しても大企業のついているNBLの企業チーム相手では運営規模で大きな差が生まれてしまうため、参加後に独立しているbjのチームが潰れてしまう恐れがあって参入できないというのが本音であった。また両リーグともに経営体力をつけることを重視していることから運営に関する成功体験や失敗体験を共有することで、改善を図っている段階である。

運営方法に関しては両リーグ共に放映権料などリーグが管理した方が収益を拡大しやすいと思われるものに関してはリーグが管理し、各チームで収益を拡大しやすいチケット収入などはチームが管理しているというシステムは同じであった。現在日本のバスケットボールを放映している局は多くないが、同じシーズンに同じ商品を扱うことになることからNBLとbjでは放映権及びスポンサー獲得に関してライバル関係が形成されてしまっている。

2. 両リーグの相違点

大きな相違点として地域性に違いが見られた。bjリーグは主に沖縄、秋田、新潟など地方での盛り上がりが目立つが首都圏のチームがあまり地域に認知されていないことを課題としていた。対してNBLはバスケットボールの聖地とも言われる代々木体育館でオールスターやプレイオフが行われることから首都圏での認知度は高い。しかしNBLとしても地域に根ざしたチーム作りを目指しており両リーグともに課題が正反対であることがわかった。また育成方針としてもNBLは日本バスケットボール協会の影響もあり日本代表強化を目指しているが、bjリーグは育成年代の選手に対しての強化策を行っている。

【考察】

本研究の目的である両リーグの統合は必要であるかどうかを念頭に置いて実施されたインタビュー調査を経て両リーグともに足りない要素を補い合えるので「統合」ではなくともより密な「協力」の必要性を感じた。特にNBLは現在のサッカー人気から見ても日本のバスケットボールが世界で戦えるレベルに向上しない限り、バスケットボールの人気向上には繋がらないと認識しており、そのためにも2つのリーグが力を合わせる必要性があると考えている。

インタビュー調査からNBLとbjリーグは互いにはないものを持ち合わせており両リーグが協力することで地域活性化と選手の育成はより効率化されと考えられる。以上のことから日本バスケットボールにとって2020年のオリンピックにむけ、みるバスケットボールとしての価値向上のために統合ではなくとも、より密な両リーグの連携及び競技力向上に向けた施策が必要不可欠である。